

教科等横断的な視点を取り入れた授業実践

国 語 科

第 1 学年

《教科等横断的な視点に立った資質能力の育成》

○ 学習の基盤となる資質・能力の育成について

本実践では複数の詩を読み、詩の言葉を読み味わって語感を磨いたり、詩の情景を想像して表現の効果について考えたりしたことを適切に表現する力の育成を図る。

「詩の鑑賞文を書く」という言語活動を設定し、詩を音読して「わからないと思った事柄や言葉」「美しさやおもしろさを感じた事柄や言葉」を観点とし、感じたことを交流したり、描かれた情景や表現の効果について考えたことを話し合ったりして、友達の意見との共通点や相違点を確かめる。

また、「鑑賞」をキーワードとして国語科と音楽科との教科等横断的な学習を行う。中学校に進学して初めての「合唱コンクール」における混声合唱での目標達成を目指して、国語科での詩の解釈の学びを生かし、合唱曲の歌詞を解釈したり、自分の考えを根拠や理由を明らかにして友達に伝えたりして、音楽科における鑑賞領域の学びを高めることもねらいとしている。そのために、国語科の単元を『『思考し、表現する力』を高める実践モデルプログラム』に基づく探究のプロセスに沿って構想する。

・言語の能力の育成

詩を読み味わい、表現するために最適な言葉を選択して使う力や根拠を明確にして感情や想像を言葉にする力、言葉を通じて伝え合う力の育成を図る。また、音楽科との教科等横断的な学習を通して、自分のものの見方・考え方を深めようとする態度や集団の考えを発展させようとする態度、心を豊かにしようとする態度を育むこともねらう。

そのために、国語科と音楽科の両教科において「鑑賞文を書く」という言語活動を位置付け、探究のプロセスに基づいて学習に取り組めるように教育課程を工夫する。

・情報活用能力の育成

本実践では、詩を読み味わう際に、紙媒体の図書やコンピュータ、情報通信ネットワークなどの情報手段を活用して、詩の作者の生い立ちを調べたり、他の作品を集めたりして、情報収集、整理、分析をする。また、端末の操作スキルを身に付け、単元を通して自分の書いた鑑賞文を保存し、共有した友達の鑑賞文との比較、推敲を通して自分の鑑賞文をよりよい表現にする。さらには、気に入った鑑賞文をアンソロジーにまとめ、学習したことを振り返り、ポートフォリオとして蓄積する。そのために、1人1台端末を適切に活用していくことやソフトウェアを活用する力も育成する。情報の収集、整理、分析の際には、著作権、情報リテラシー、情報モラルを含んだ情報活用能力も育成する。

・問題発見・解決能力の育成

本実践では3つの単元をそれぞれ小単位とした大単元を構想して時間数を確保する。また、実践モデルプログラムの過程と結び付けることで主体的な学習を目指す。

1 単元名「言葉に立ちどまる 豊かな表現にふれ、言葉のもつ力を考える」

小単元「詩の世界」

「比喻で広がる言葉の世界」

「言葉を集めよう もっと『伝わる』表現を目ざして」

2 単元の目標

- 身近なことを表す語句の量を増やし、語や文章の中で使って語彙を豊かにすることができる。〈知識及び技能〉
- 語と語や文と文との続き方に注意しながら、内容のまとまりが分かるように書き表し方を工夫することができる。〈思考力、判断力、表現力等〉
- 時間的な順序や事柄の順序などを考えながら、内容の大体を捉えることができる。〈思考力、判断力、表現力等〉
- 場面の様子に着目して、登場人物の行動を具体的に想像することができる。〈思考力、判断力、表現力等〉
- 言葉がもつ価値に気付くとともに、進んで読書をし、我が国の言語文化を大切に、思いや考えを伝え合おうとしている。〈学びに向かう力、人間性等〉

3 教科等横断的な視点を取り入れた授業実践について

教科等横断的な学習を構想する際は、総合的な学習の時間との組合わせを図ることが多く、その場合には学習対象が現代的な諸課題となることが多いため、必然的に領域としての統合が図りやすくなる。担任が多くの教科を一人で指導する小学校においては、この領域としての統合がやりやすいと言える。しかし、教科担任制の中学校では、領域としての統合はむしろやりにくいのではないだろうか。

そこで、本実践の国語科と音楽科における教科等横断的な学習では「学習の基盤となる資質・能力」を育成することを重点とする。したがって、育成しようとしている能力は「教科等の学習を通して育まれる資質・能力」と「学習の基盤となる資質・能力」という2つの役割を担う。そのため、教科での学習成果を生徒自身が関連付けて統合できるように、教科等横断的な学習を構想していく必要がある。そこで、「詩の世界」「比喻で広がる言葉の世界」「言葉を集めよう もっと『伝わる』表現を目ざして」の3つの単元をそれぞれ小単元とし、それらをまとめて「言葉に立ちどまる 豊かな表現にふれ、言葉のもつ力を考える」という大単元を構想した。このことにより、生徒は言語能力だけでなく、情報活用能力、問題発見・解決能力を意識して学習に取り組むことができると考えた。

本実践では特に言語能力に重点をおいて教科等横断的にその育成を図る。そこで、「言語能力を構成する資質・能力」（中央教育審議会答申 2016）を（表1）にまとめる。「知識及び技能」では国語科で指導する内容が多いが、「思考力・判断力・表現力等」及び「学びに向かう力・人間性等」では国語科以外でも教科等横断的に取り組むことができる。

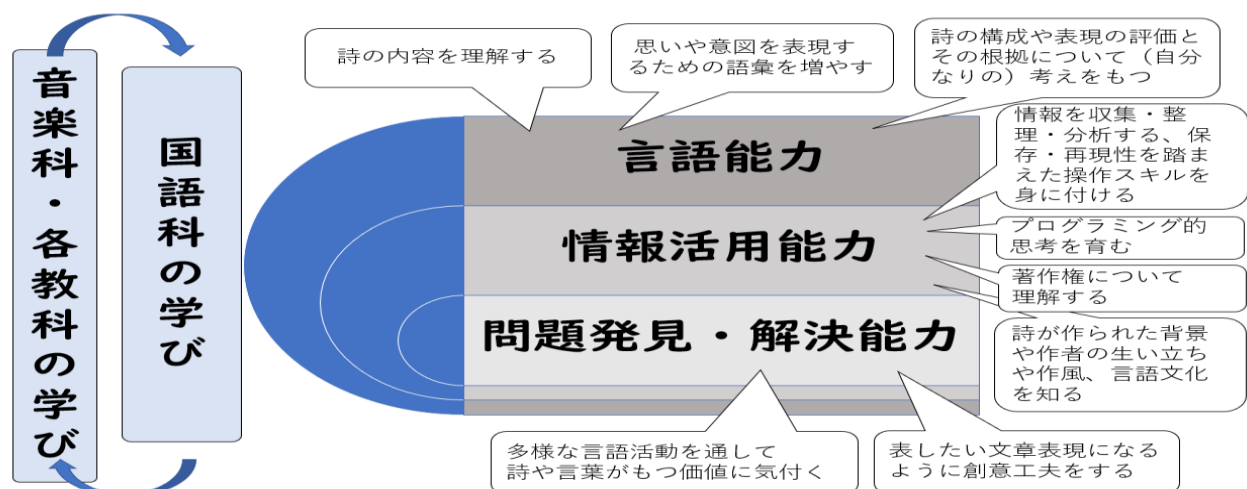
また、国語科における育成したい資質・能力について、学習の基盤である

言語能力、情報活用能力、問題発見・解決能力の視点で（図１）のように整理した。

（表１）言語能力を構成する資質・能力

知識・技能	・言葉の働きや役割に関する理解 ・言葉の特徴やきまりに関する理解と使い分け ・言葉の使い方に関する理解と使い分け ・言語文化に関する理解 ・既有知識（教科に関する知識、一般常識、社会的規範等）に関する理解
思考力・判断力・表現力等	・情報を多角的、多面的に精査し構造化する力 ・言葉によって感じたり想像したりする力 ・感情や想像を言葉にする力 ・言葉を通じて伝え合う力 ・構成、表現形式を評価する力 ・考えを形成し深める力
学びに向かう力・人間性等	・社会や文化を創造しようとする態度 ・自分のものの見方や考え方を深めようとする態度 ・集団としての考えを発展・深化させようとする態度 ・心を豊かにしようとする態度 ・自己や他者を尊重しようとする態度 ・自分の感情をコントロールして学びに向かう態度 ・言語文化の担い手としての自覚

（図１）国語科で育成する音楽科と関連した資質・能力と関連する具体例



（１）単元で育てたい力

○身近なことを表す語句の量を増やし、語や文章の中で使って語彙を豊かにする。 【国語：知識及び技能】

○詩について調べた情報を収集、整理、分析し、作者の思いや詩の表現から根拠をもって内容を解釈したり、自分の考えを文章に表したりする。

【国語：言語能力、情報活用能力、問題発見・解決能力】

（２）教科等横断的な視点に立った育てたい力

○事象や行為、心情を表す語句の量を増やすとともに、話や文章の中で使うことを通して、語感を磨き、語彙を豊かにする。 【国語：知識及び技能】

○比喩、反復、倒置、体言止めなどの表現の方法を理解し、使う。

【国語：知識及び技能】

○文章の構成や展開、表現の効果について、根拠を明確にして考える。

【国語：思考力・判断力・表現力等】

○教材曲を鑑賞し、感じたことを文章に書き、友達と共有することで自分のものの見方や考え方を広げる。【国語・音楽：思考力・判断力・表現力等】

（３）共通の育てたい力

○詩（歌詞）の内容を理解する。

【共通：言語能力】

○課題を発見し、学んだことを生かして解決方法を考え、実践し、伝え、共有し、振り返ることで、学びを深める。

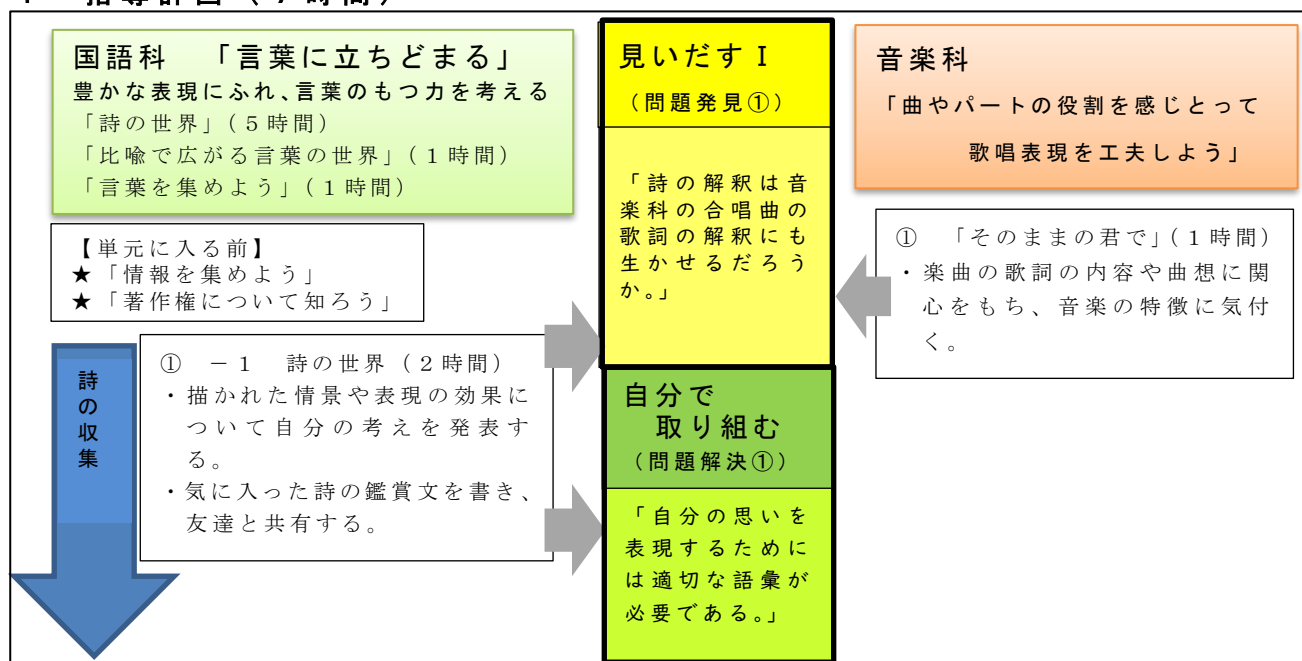
【共通：言語能力、問題発見・解決能力】

○詩（歌詞）に関する情報を収集・整理・分析する。【共通：情報活用能力】

（４）単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
○身近なことを表す語句の量を増やし、語や文章の中で使って語彙を豊かにしている。	①語と語や文と文との続き方に注意しながら、内容のまとまりが分かるように書き表し方を工夫している。 ②時間的な順序や事柄の順序などを考えながら内容の大体を捉えている。 ③場面の様子に着目して、登場人物の行動を具体的に想像している。	○言葉がもつ価値に気付くとともに、進んで読書をし、我が国の言語文化を大切にして、思いや考えを伝え合おうとしている。

4 指導計画（7時間）



詩の収集・鑑賞文の書きため・アンソロジーの編集

② 比喻で広がる言葉の世界（１時間）
・ 比喻の定義を確かめ、その効果について考えたり、まとめたりする。

①－２ 詩の世界（１時間）
・ 詩を創作し、自分の詩や友達の詩の鑑賞文を書いて交流する。

※「詩の世界」の学習の詩の創作の前に「比喻で広がる言葉の世界」の学習を行い、詩の創作における表現を広げたり、深めたりすることをねらう。

③ 言葉を集めよう（１時間）
・ 言葉を集め、言葉の選び方を工夫して鑑賞文を書く。
※教科書では「紹介文」を書くことになっているが、「鑑賞文」を書くことにする。

④ 詩の世界（１時間）
・ 合唱曲（自由曲）の歌詞の解釈をして、鑑賞文に表現し、友達と鑑賞文を共有する。

⑤ 詩の世界（１時間）
・ 合唱コンクールを終えて、再度合唱曲（自由曲）の鑑賞文を書いたり、推敲したりする。

「倒置や比喻、繰り返し等の表現の工夫は詩や歌詞の解釈の際、想像を助ける。」

見いだすⅡ
（問題発見②）

「合唱曲の歌詞の解釈には音楽鑑賞に必要な語彙や観点が必要なのではないか。」

広げ深める
（問題解決②）

「感情や想像を表す語彙の他に音楽的な要素を表す語彙も必要だ。」

「一人一人が違う解釈をしているが、合唱ではそれぞれの思いを伝え合い、より集団としての考えに発展させなくてはならない。」

まとめあげる

「自分の体験と結び付けて考え、ものの見方・考え方を深めようとする。」

「鑑賞文をくり返し書くことで、自分の考えが明確になる。」

「詩の表現の効果についてより深く振り返る。」

②「そのままの君で」（２時間）
・ 楽曲の音楽を形づくっている要素を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じ取る。
・ 楽曲の歌詞が表す情景や心情を想像して歌う。

★あえて学習の途中で「見いだす」場面を入れて、**探究と学びの調整**を促す。

合唱コンクール

③「そのままの君で」（２時間）
・ 自分と同じ声部の他者の声や、他の声部の声などとの重なりやつながりを聴きながら歌う。
・ パートの役割を感じながら、他者や他声部の声、全体の響きなどを意識して歌う。

練習

合唱コンクール

④「そのままの君で」（２時間）
・ どのように歌唱表現するかについて、思いや意図を持ち、様々な歌唱表現を試す。
・ 楽曲にふさわしい表現で主体的に合唱する。
・ 学習を振り返る。

【並行して行う活動】

学習と並行して、詩や好きな曲についての情報を収集し、集めた詩や曲についての鑑賞文を書く活動を行う。書きためた鑑賞文を「楽しい気分の時に読む」「雨の日に読む」等、自分で観点を決めてアンソロジーを編集する。編集作業は端末上で行う。

5 実践

(1) 目指す生徒の姿

・学習の基盤となる資質・能力の育成について

ア 言語能力の育成（「詩の世界」2時）

(ア) 生徒を見取る際の主なポイント

- 詩の情景を言葉や表現から想像し、表現の効果に触れながら、どこによさを感じたのかについて鑑賞文に表現している。（鑑賞文から）
- 鑑賞するための語彙を適切に選び、使っている。（鑑賞文から）
- 自分のものの見方や考え方の広がりを知っている。（振り返りから）

(イ) 指導と評価の実際

① 授業の概要（「詩の世界」第2時）

教科書の3編の詩（「一枚の絵」（木坂 涼）、「朝」（吉田 加南子）、「未確認飛行物体」（入沢 康夫））の情景や作者の思いを言葉や表現の工夫から想像を膨らませて読み、最も心に響いた詩を選んで鑑賞文を書く。全体で教師見本から文字数や構成を分析してゴールを見通し、前時の学習内容を生かしながら、それぞれ自分の鑑賞文を書き進める。

【鑑賞文の書き方 Point】

鑑賞文の書き方Point

- ①この詩どんな詩？を短く説明する。
- ②詩の情景
→①の具体的な説明をする。（詩のストーリー紹介だと思って書くといいかも！）
- ③詩の表現（作者の工夫を見つける。）
- ④自分の感想を述べる。

【鑑賞文見本】

「朝」 吉田加南子

この詩は、朝の澄んだ空気の中、空の遠さに気づいた作者の気持ちを表現した詩だ。

作者は、朝、学校に行こうと家を出た学生だ。ふと空を見上げたら、澄んだ青空と自分の家の屋根が目に入った。まるで、空と屋根がふれているように見えたが、実際には、ふれていない。そう、まじわっていないのだ。

「——まじわることなく」の部分に倒置法が使われており、ふれているように見えて、ふれていない。まじわっていないのだということを強調している。つまり、それだけ、空は手の届かぬ遠い存在だということだ。

私はこの詩から、空の偉大さを感じた。いろいろな空があるが、朝のすがすがしい空気の中で感じる空の広さは、一日のやる気につながる気がして、すごく好きな詩になった。

・「鑑賞文の書き方 Point」と「鑑賞文見本」を見比べて分析することで、自分が書く鑑賞文をイメージしやすくしている。
・色分けすることで文章の構成を分かりやすくしている。

② 実際の生徒の姿

○「おおむね満足できる」状況と評価した例

一枚の絵 木坂 涼

この詩は、一羽の水鳥が朝、湖をめぐる情景を表現した詩だ。

作者は水鳥が描かれている絵を見た画家だ。作者はこの絵を見て2つの情景を思い浮かべた。一つは自分と同じ画家の水鳥が湖で絵を描いている情景。もう一つは水鳥が朝の温かい光を湖に配っている情景。この2つを一つの詩に書き記した。

「湖水をめぐる」と「画家きどりで〜」の部分で倒置法が使われており、「画家きどりで〜」の言葉を強調している。さらに隠喩も同時に使われており、さらにわかりやすく水鳥の情景を表現している。「自筆のサインのように」の部分にも直喩が使われどのように動きを止めたのか頭が浮かぶ。

僕は、この詩から水鳥の美しさを感じた。水鳥がどのように湖を飛び、めぐるのか、水鳥が止まるときの光景がこの詩を見るとわかりやすく具体的に伝わってきたので、この詩がとても好きになった。

【構成】・教師見本の構成を真似して表現している。

【表現】

- ①＜語彙＞・「倒置法」「隠喩」「直喩」といった表現の工夫を表す語彙を使用し、その部分を抜き出して表現している。
- ②＜技法＞・第2段落で「～情景。」と体言止めを2度繰り返して使い、読み手に印象付けている。
- ③＜見方・考え方＞・第2段落の「作者は水鳥が描かれている絵を見た画家だ」という最初の一文が、この生徒の鑑賞文のインパクトを強めている。

○「十分満足できる」状況と評価した例

- 詩の内容を捉えている。
 - 詩の内容を想像している。
 - 鑑賞文に技法や言葉の使い方等の表現に関する表記がある。
 - 鑑賞文の4段落構成に「内容のまとめり」がある。
- ※特に、「内容のまとめり」で評価した。

【鑑賞で使いたい語彙】

- ・～巧みである。
- ・～に優しさを添えている。
- ・鮮やかな印象を残す。
- ・～と重なり合う。
- ・まるで～のようだ。
- ・～のような様子を表している。

※「短歌に親しむ」「国語2」（光村図書）より

○「努力を要する」状況と評価した例

鑑賞文は書いているが、詩の内容の理解ができていない。また、鑑賞文の中で詩のよさを感じた理由を表現の効果や言葉の使い方などを挙げて表現できていない。

「詩の世界」の学習では、第2時と3時の学習の間に「比喻で広がる言葉の世界」を入れるように学習計画を立てた。詩の創作（「詩の世界」の学習の第3時）の前に比喻表現の効果について学習することで、創作における表現の広がりや深まりを期待した。また、「詩の世界」の第4時では合唱曲の鑑賞文を書く。音楽科における鑑賞の学習で学んだ語彙がどのように使われるのか、表現の工夫の共通点や相違点は何かを意識させる。

【第4時の教師の見本と生徒の鑑賞文】※合唱曲の鑑賞文 「教師見本」

例

卒業する「ぼく」が、仲の良い友達に変わらない友情を願っている歌だ。「新しい風に吹かれて心なびくとき」というところは、卒業して環境が変わり、新しいことに心ひかれるかもしれないということだと思う。でも、そんなときは「君」を思い出して変わらないでいたいとぼくは思っている。

この歌詞からは、二人の友情と、その友情を永遠にしたいと思っているぼくの気持ちが伝わってくる。私も、そんな友達ほしい。

Point

一文で歌詞を説明。

卒業する「ぼく」が、仲の良い友達に変わらない友情を願っている歌だ。「新しい風に吹かれて心なびくとき」というところは、卒業して環境が変わり、新しいことに心ひかれるかもしれないということだと思う。でも、そんなときは「君」を思い出して変わらないでいたいとぼくは思っている。

この歌詞からは、二人の友情と、その友情を永遠にしたいと思っているぼくの気持ちが伝わってくる。私も、そんな友達ほしい。

歌詞を読み取った感想。曲への思い。

- ・詩の鑑賞文と構成を変えたため、改めて見本を提示した。
- ・思いの根拠となる歌詞を取り出して表現することが基本となる。

合唱曲「あさがお」（生徒の鑑賞文）

この歌は、主人公とあさがおを重ねて歌っている私たちへの応援歌だと思います。まず、「負けないって強い心で立ち上がって進んでも負けそうな弱い自分に寄りかかってしまう」という部分から、主人公は落ち込んでいるということが読み取れます。でも、その後の歌詞に「まっすぐ空に伸びていく花はこんなに暑い日差しにも負けない強さがある」という部分があり、主人公は暑い中でも頑張って咲いているあさがおに、勇気をもらいます。このことから、この曲は作詞者が「僕」と「あさがお」を通して私たちにエールを送ってくれている曲だと思いました。

また、作詞者がなぜ、ひまわりではなくあさがおを選んだのかを考えたとき、私は、あさがおがつるを支柱などに絡ませながら花を咲かせるということを人に喩えたとき、自分の力だけで目標に向かっていくのも大切だが、たまには他の人の力も借りながら頑張ることが大切だということを私たちに伝えるために、「あさがお」という花を選んだのではないかと思います。私はこの曲を聞いて、前向きになりました。これから何か悩み事があったときこの曲を聞きたいと思います。

- ・教科書に掲載されている詩の鑑賞文と比較すると、より考えや思いが具体的に書き表されていることがわかる。歌詞の内容をより自分に引き寄せて考えている。「作詞者がなぜ、ひまわりではなくあさがおを選んだのか」という課題を見だし、自分の今の生活と結び付けて考えているのがわかる。「合唱コンクール」に向けて学級みんなで歌うという目的をもつことで、より主体的に歌詞の内容を読み取ろうとしている。

【第5時の生徒の振り返り】※合唱コンクールを終えての学習の振り返り

この歌は、主人公とあさがおを重ねて歌っている私たちへの応援歌だと思います。まず、「負けないって強い心で立ち上がって進んでも負けそうな弱い自分に寄りかかってしまう」という部分から、主人公は落ち込んでいるということが読み取れます。でも、その後の歌詞に「まっすぐ空に伸びていく花はこんなに暑い日差しにも負けない強さがある」という部分があり、主人公は暑い中でも頑張って咲いているあさがおに、勇気をもらいます。このことから、この曲は作詞者が「僕」と「あさがお」を通して私たちにエールを送ってくれている曲だと思いました。

- ・歌詞に込められた思いを自分事として考え、友達との対話を通してより深めていることがわかる。
- ・最後の「詩（詞）」は「おもしろいと思った！」という一文が学習の達成感を表している。

合唱コンクール感動したこと
四年生のあさがおの合唱です。元の曲調が感動をよぶような雰囲気があるけど、四組特有の歌い方と指揮と伴奏の全体的な感じがよく伝わり、どのクラスよりも透明感のある中、確かな力強さもある合唱に心を動かされました。

- ・「透明感がある」「確かな力強さ」という表現は合唱する活動を体験しないと使用しない語彙だと考える。合唱体験を通して、鑑賞する際に使う語彙が増えていることがわかる。

イ 情報活用能力の育成（「詩の世界」第2時）

（ア）生徒を見取る際の主なポイント

- 1人1台端末等を活用しながら、必要な情報を収集・整理・分析・表現している。
- 端末の操作スキルを身に付けている。

（イ）指導と評価の実際

①授業の概要

鑑賞文を書く際に自分の思いや考えを表現するのに適切な言葉や表現を追究する態度を養うことを目指した。推敲する活動はよりよい文章表現にするためには欠かせない活動であり、思考力・判断力・表現力を養う点でも重要な活動である。しかし、生徒にとっては書き直すことが面倒で、敬遠される活動でもある。そこで、1人1台端末を活用して鑑賞文を書いたり、推敲したりすることで、書き直しの面倒さを軽減させた。また、共有機能を使うことで、友達の鑑賞文を共有し、自分の鑑賞文の表現に生かすこともできるようにした。

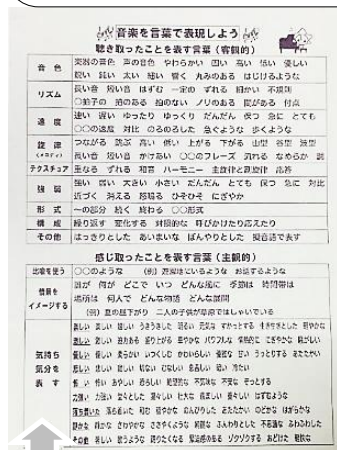
②実際の生徒の姿

十分満足できる	おおむね満足できる	努力を要する
・1人1台端末を使って集めた情報や鑑賞文を自分の観点で整理している。（アンソロジーを編んでいる。）	・1人1台端末を使って、鑑賞文を書いたり、推敲したりしている。 ・共有機能を使って、友達の鑑賞文を読んだり、教師の資料を参考にしたりしている。 ・1人1台端末を使って、情報を調べたり、探したりしている。	・1人1台端末等を効果的に使えていない。 ※端末を使わず、紙ベースで活動することは否定しない。

自分の作品だけではなく、友達の作品も入れて編集しよう。編集のテーマや構成を考えよう。

全文を書き直す必要がなく、推敲がしやすい。詩のイメージを絵や写真で表してみよう。

詩の作者の他の作品がすぐに探せて、読むことができた。作者の複数の作品を読むことで、作風がつかめた。



音楽科の教諭が作成した「語彙見本」も活用した。



自分の選んだ詩やその鑑賞文に合わせて、背景に絵や模様を入れたり、色をつけたり、文字の字体を選んだりして編集している。その際、著作権や肖像権等に注意している。

(2) 実践を終えて

1 学習の基盤となる資質・能力の育成について

・言語能力の育成

本実践では、詩の鑑賞文を書く活動を通して言語能力の育成に取り組んだ。鑑賞文において自らの考えや感じたことを表すのに必要な語彙を増やしたり、比喩や反復といった表現の方法や効果、文章の構成や表現の効果について考えたりすることができた。この言語能力は音楽科における曲の鑑賞文を書くという言語活動においても考えを深めることに役立った。また、「鑑賞文を書く」という言語活動を国語科と音楽科で行うことにより、両教科での鑑賞の表現における語彙や表現の共通点や相違点を理解することができ、教科における見方・考え方を深めることができた。

・情報活用能力の育成

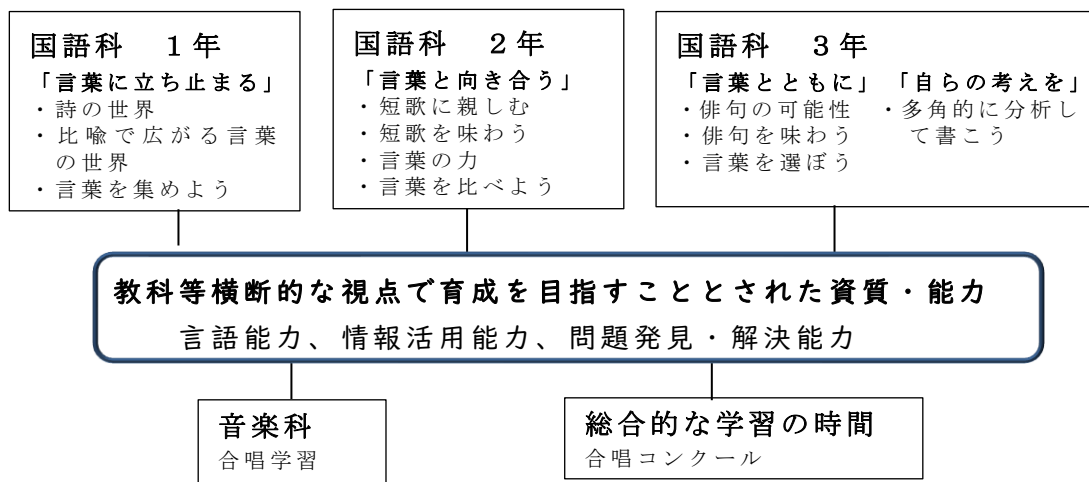
本実践では、1人1台端末を活用し、情報の収集や鑑賞文の作成・推敲を行った。また、鑑賞文を端末に集め、自ら決めたテーマで編集する活動も行った。情報収集の際には著作権にも気を配ることができた。友達の鑑賞文を読んだり、推敲し合ったりする場面では共有機能を使い、グループだけではなく、学級の多くの友達の鑑賞文を短時間で見合うことができた。

・問題発見・解決能力の育成

本実践では、3つの単元をそれぞれ小単元とした大単元を構想したことにより、学習時間を確保した。このことにより、単元を通して自らの課題を追究・解決することがよりやりやすくなった。また、単元の学習過程と実践モデルプログラムの過程を結び付けることで、意図的に自らの学びを調整する学習過程にすることができた。特に、「自分で取り組む場面」の途中で「見いだす場面」を再度入れることで、学びの調整を促すことができた。音楽科の学びと結び付けてより探究する力を高め、学びを深めることができた。

本実践では1年生の実践を取り上げたが、2年生、3年生においても学習を展開することができ、全学年で取り組むことで資質・能力を高めることが可能であると考ええる。

そこで、他学年でのつながりを以下に示す。（光村図書使用）



3年生での「自らの考えを」では、「批評する」という言語活動を行う。この批評するという言語活動は中学3年生で初めて出てくる活動である。文章を批評的に読むとは、文章に書かれていることをそのまま受け入れるのではなく、文章を対象化して吟味したり検討したりしながら読むことである。文章中で述べられている主張と根拠との関係が適切か、根拠は確かなものかなど、述べられている内容の信憑性や客観性を吟味しながら読むことが求められる。登場人物の行動や物語の展開の意味を考えたり、登場人物と自分との考え方の違いを確認したりし、書き手の表現の仕方を評価する。3年生では「鑑賞文を書く」という言語活動の他に「批評する」という言語活動を行い、資質・能力を深める実践も試してみたい。

2 教科等横断的な視点に立った評価について

文部科学省の「新学習指導要領の全面実施と学習評価の改善について」では、教科等横断的な視点で育成を目指すこととされた資質・能力についての評価は、各教科等における観点別学習状況の評価に反映するとある。また、言語能力や情報活用能力、問題発見・解決能力など教科等横断的な視点で育成を目指すこととされた資質・能力は、各教科等の学習の文脈の中で育成した上で、横断的に発揮されるようにすることが重要であり、各教科等の指導と評価の一体化を図る中で資質・能力を育成した上で、それらの資質・能力が教科等横断的に関連付けて発揮されるようにすることが重要としている。したがって、各教科等の評価規準とは別に、教科等横断的な資質・能力に関わる評価規準を設定して評価することは必ずしも必要ではないとも書かれている。

そこで、この考えに則って本実践の評価を考えると「言語能力」は学習者間の対話的・協働的な学習において「鑑賞文を書く」という言語活動を通して育成するので「思考・判断・表現」の評価の中で行い、「情報活用能力」は問題解決の過程で、個別の知識をどのように相互に結び付けるか、どのような知識の追加を必要とし、どのような方法で知識を得るかといった「思考・判断」の過程で発揮されるため、「思考・判断・表現」で評価を行う。さらに、「問題発見・解決能力」は国語科や音楽科で身に付けた力を統合的に活用することの中で発揮されるため、「主体的に学習に取り組む態度」で評価することが考えられる。

中学校では教科担任制のため、領域の統合は難しいが資質・能力に視点を置いて教科を統合することは十分に可能である。資質・能力は可視化しにくいいため、無意識のことが多いが、普段の学習においてすでに行っているとも言えるのではないだろうか。そこで、学校の生徒の実態を分析し、どのような能力を育成するのかを全職員で明確にして、教科等横断的な視点に立って教育課程を編成することで育成したい資質・能力を意識することが大切である。特に、言語能力においては、国語科をその基盤教科として位置付け、どの教科とも教科等横断的な視点に立って資質・能力を育成することができると考える。